

初期の慶派について (一)

現在鎌倉様式の成立をめぐる多くの諸家の説には、藤原末期の

院派、円派、及び南都興福寺系の仏師（奈良仏師）の三派の活動を考
え、藤原末にこの奈良仏師を中心として鎌倉的な新様への気運が醸成
され、徐々にそれが運慶らの北円堂の諸像、あるいは東大寺南大門の
力士像などの様式に展開して行ったかの如き説が多く取られている様
である。特に京都博物館の毛利久氏は「美術史」に発表された「定朝
より運慶へ」のすぐれた研究をはじめ、その他の論文によって、我々
を啓発するところは少くないが、その中心となる「奈良仏師」の系列
に康慶、運慶をはじめとする所謂「慶派」を直接に結び付ける点に
関しては、問題が鎌倉様式成立の鍵ともなる可きものであるだけに、
かなり微妙なものを持っている。

ここに小論の眼目とする点は、以上の様な諸家の説を離れて、鎌倉
初期に於ける彫刻様式の展開を新たに追及しようとする点であるが
研究の不備な点も少くなく、幾多の訂正さる可き問題を持つ試論の域
を出ぬことを予めお断りしておきたい。

久 納 慶 一

一 藤原より鎌倉へ

藤原時代の末期の彫刻に見られる鎌倉的な要素として先づ挙げられ
るのは、玉眼の手法である。この玉眼を有する像の最も古い例は仁平
元年（一一五一）の銘を持つ長岳寺の阿弥陀三尊像であるが、これに
次いで峯定寺毘沙門天（久寿元年一一五四）、中川成身院にあったと
言われる橋本氏藏の毘沙門天（応保二年一一六二）、戦災で中尊を
失った七寺阿弥陀三尊像（仁安三年一一六八）ごろなどが玉眼を持ち
製作年代の知れるものとして挙げられる。これ等の作品について毛利
氏は「これらの作家の多くのものに奈良仏師を想定することも可能の
わざである。長岳寺、旧成身院、旧永久寺の諸像は地理的、歴史的
にみてもおそらく奈良仏師の手になったと考えて誤りないであろう：
」（図説日本文化史大系）と述べておられるが、玉眼を使用した像
は必ずしも奈良仏師とは結びつかないし、又果してこれらの寺相互に
同系統の仏師を起用する様な可能性をもつ連関が考えられるであらう
か。

先づ玉眼を使用した例として「仏并像以玉入眼事、此時始例」と述べている奥州の毛越寺の丈六薬師、十二神将像は、吾妻鏡の文治五年九月十七日の条に見える幕府に対する寺家注文によると、京都の仏師雲慶の作とされている。この造立の年代は基衡、九条関白忠通、鳥羽禅定法皇などの名が見えるところからして、久寿三年(一一五六)以前と考えられる。この注文状には録物などにかんがりの誇張がある様だが、とにかく長岳寺の像とさして変らぬ頃に玉眼を使用した例が京都での製作でも知られるわけで、玉眼を用いることは、恐らくこの頃の一般的な新傾向として受け取っても良いと思う。

次に、長岳寺、峯定寺、成身院などの寺の系統については、未だ研究が不充分でよく分っていないが、長岳寺は空海創建と伝えられ、一応真言の系統と考えられるが、承安三年(一一七三)六月の興福寺東西金堂衆の多武峯攻略の際には、この釜口あたりが衆徒の拠点となった様で、恐らくそれ以前の時期から、この長岳寺は、興福寺の傘下にあったのではないかと考えられる。徒って、この阿弥陀三尊像の作者に興福寺大仏師の法眼康助、あるいはその子康朝あたりを想定することも不可能なことではないが、現在のところは、この像の作者が奈良仏師であるとも決められない。

中川の成身院の毘沙門天については、この成身院は現在興福寺の別院と言われるが、これも果して創建当初からそう言う形であったかどうかは極めて疑わしい。招提千歳伝記では第十六祖実範律師が醍醐寺より忍辱山に移り、そこに住していた時、花を求めて図らずも中川に至り、始めてそこに根本成身院を建てたとある。この実範律師伝では

その後永久四年(一一一六)唐招提寺の伽藍を修理云々とあるが、忍辱山円成寺は東寺系の仁和寺の寛遍大僧正の開基になるものと伝えられ、大体保元年間(一一五六～一一五八)あたりに造られたものと考えられるから根本成身院はこれより後と考えて、ここの毘沙門天の造られた応保二年(一一六二)あたりが、この成身院の創建の年代と考えて良いだろう。そうすると、現在運慶作の大日如来像を伝えている忍辱山円成寺と言い、又この成身院と言い、醍醐寺、仁和寺あたりに縁があり、真言系の末寺と考えた方が良いだろう。従ってこれらの像の作者にも、興福寺の仏師を考えるよりは、寧ろ醍醐、仁和寺などに縁の深い仏師を想定した方が良いだろう。

以上の様に興福寺の仏師の活動に対する疑問は、後に述べる慶派仏師との関係につながるものであるが、果して大仏師系図のいくつかが伝えている様に、慶派が康助、康朝らの興福寺大仏師職を受けつぐものであるものか、どうかに就いては疑わしい点が少くない。我々は従って従前無批判に採用されて来た鎌倉初期の慶派の歴史を、単に作品そのもののみを取り上げるだけではなく、その作品を包む歴史的、社会的な関連をも包括した上で見て行かなければならないだろう。

二 慶派仏師の所属系統について

運慶の出所にとって最も確実な事実、彼が康慶の実子であったことしか知られていない。ではその康慶は一体如何なる経歴を持つものであろうか、この点に関しては、恐らく奈良仏師と言われる康朝の弟

子であつたらしいと言う程度の推測しか出来ないのが現状で、あるいはこの康朝とは全く縁のない地方仏師であつたと考えられるふしもある。(註、僧綱補任の寿永二年の条には、肥前小仏師と記されている)この点に関しては、不確定な論議しか出来ず、又作品も残っていないから、これ以上のことは従前は言うことが出来なかつたのであるが、ここで又新たにこの問題を持ち出したのは、近年一つ新しい運慶史料が出て来たこと、又従前の教少い史料から余り問題とされていなかった点を拾い上げて、これ等のものを新たに綜合することに依つて、ほぼ見通しが付け得る段階に達し得たからである。

先づ慶派の由来を語るものとしてここに取り上げる史料は、文治五年五月に快慶が造立した三尺の弥勒菩薩立像(ボストン博物館蔵)の胎内に納められている経巻の奥書にあるこの像の造立の願文で、この中に「今この造仏書経の功德を以て先づ過去雙親先師権僧正の離苦得樂に資し云々」とあるが、この快慶の先師権僧正とは一体誰であるかと言うことである。この願文の書かれた文治六年以前に没した僧正の数は余り多くはないはずで、その名と、寺の系統、没年などを、東大寺要録、興福寺別当次第、三会定一記、玉葉などから調査してまとめるところ、嘉応元年より文治五年迄の二十年間に没した僧正、或は没したと考えられる僧正は、全部で二十名にものぼっている。このうち興福寺五名、東寺―東大寺二名で、残りの十三名は皆天台系である。このうちで天台系の寺院には何一つ慶派の活動ぶりが伝っていないから、快慶の先師と言うものも興福寺、東寺の僧正あたりに限つても良いと考えて、この十三名の天台の僧正を先づリストからはづすことに

初期の慶派について(一)

する。すると残るのは、興福寺では、恵心(伊豆)僧正(承安元年九月廿五日没、五十七才)、尋範大僧正(承安四年四月九日、七十四才)覚珍権僧正(承安五年十月廿四日、七十七才)、教縁権僧正(治承三年四月十二日、八十一才)、玄縁権僧正(治承四年十二月廿六日)であり、東寺の方は、禎喜大僧正(寿永三年十月一日)定遍権僧正(文治元年十二月十八日、五十三才)の二人で、この二人は同時に東大寺別当を兼任している。

快慶の造立したこの弥勒菩薩像は元来は興福寺の大乗院にあつたものと言われるが、そうすると教縁あるいは玄縁あたりが快慶の先師として有力なものと考えられねばならない。然しそれにしては、この快慶が願文を書いた文治六年からは九年あるいは十年も以前に没していることになるので、没年が少し離れ過ぎている様である。この点からすれば文治元年に没している定遍権僧正を快慶の師として考えることが一番妥当ではなからうか。然も彼は東大寺の別当として大仏の開眼導師をつとめており、その際にも後述する様に康慶あるいは運慶あたりが関係していること、或は、円成寺での運慶の仕事にも仁和寺の僧として関係し得ることも考えられ、又建久年間以後の慶派の活躍が主としてこの東寺系統の諸寺院に多く伝えられている点などを考えれば、快慶の先師権僧正とは、この仁和寺、円教寺別当、東寺長者、東大寺別当などを一身に兼ねた定遍権僧正が極めて有力なものと考えられる。

第二に運慶が文治年間「勾当」であつたことが知られているが、ではどこの勾当であつたかと言うことが問題になる。昨年返子の浄楽寺

で発見された銘札によると「大仏師興福寺内相応院勾当運慶……」と記してあって、一見すると、これは如何にも興福寺の勾当と受取られ易い。(註、東京文化財研究所の久野氏は美術研究一〇四号で運慶を興福寺仏師として解釈されている)。ところが私の調べた範囲では、興福寺にはそういう院家が見当たらない。又、そう言った院号を朝廷から許された高僧も知られていない。従ってこれは積極的な否定ではないが、一応興福寺には相応院なる院家はなかったものと考た方がよいのではなからうか、それは、無論興福寺での院家の名の付け方の一般的な傾向をも考慮しての上である。元来「相応」の名は相応経の名に由来するものと考えられ、それは密教系のものであって、天台には以前に「相応和尚」の名を見ることが出来るが、法相の興福寺内にこうした院家が置かれることは、極めて特殊な事情でもなければ不可能なことではなからうか。従ってこの造像銘札の解釈は「相応院勾当運慶が興福寺内で造り始める云々」とした方がよいであろう。ただこの相応院がどこにあったものか、判然とせぬが、高野山に伝えられる声明の源泉に中川寺の実範の名が挙げられ、その声明が仁和寺の頭塔「相応院」に於いて一流をなしたとの文書が、現在高野山に見られるから、或いは運慶はこの「相応院の勾当」の職名をもらっていたのではないかと思われる。

(快慶の先師が定遍であるなら、この推定が更に確実なものとなるであろう)

次に検討せねばならぬことは、この康慶、運慶らと、興福寺大仏師を名乗った成朝との関係である。吾妻鏡の文治二年三月二日の条に見える有名な南京大仏師成朝言上からすれば、康助、成朝、成朝らは、奈良に住して、代々興福寺大仏師として寺家に専属する仏師であった

と思われる。この興福寺の治承の回録の復旧にあたっては、彼等の先づ受持った堂は、金堂とか講堂、南円堂などの公卿側の経営になるものでなく、寺家の独自の沙汰によって造立されることになった東金堂であったことも、興福寺所属の仏師として当然の経路であろう。この興福寺造営のいきさつは、後で述べることにして、ここで注目したい事は、この幕府に対する歎願が書面でなされているらしい点、また成朝が関東に下向している間に、院性がその造仏を競望した云々と言う内容などからして、明らかにこの言上は彼が鎌倉より奈良へ戻って来らなされたものと考えることが出来る。この成朝の鎌倉での仕事は、頼朝の発願による勝長寿院の丈六の阿弥陀像の造像であるが、これは元暦元年(一一八四)十一月廿六日に伽藍の敷地が決められてから、約一年後の文治元年(一一八五)十月廿四日にその供養が行われているから、成朝の鎌倉滞在も大体この一年間に前後するものである。このことに関連して伊豆北条の願成就院の阿弥陀三尊、不動、多聞などを運慶が文治二年(一一八六)五月から始めたことを成朝の関東下向に於ける一連の事蹟と解される向がある。然しこの願成就院の造立者は將軍頼朝の妻の父であったとは言っても、幕府の中ではやや特異な立場にあった平朝臣北条四郎時政である。この時政は前述した鎌倉の勝長寿院の供養の直後に上洛したものらしく、玉葉には文治元年十一月廿四日に到着が記されている。そしてその関東下向は文治二年三月廿五日に京都を出発して(玉葉)鎌倉には四月十三日に到着しているが、(吾妻鏡)恐らく彼は頼朝の勝長寿院の造営に刺戟されて、それにも劣らぬ伽藍の営作を企画したのではないだろうか。現在この

寺に残る運慶の造像銘札には「文治二年五月三日奉始之」とあるが、これは願主時政の三月から四月の関東下向の行動と深い関連があるものと考えねばならない。恐らく時政は関東下向に際して、運慶を同道したのか、或はその際造像を依頼したものと思われる。従って、この運慶の仕事は成朝の関東下向の際の仕事とは、直接には関係のない別個の事と考えねばならない。

この様な以上に述べて来た諸点からすれば南都仏師の成朝に対する康慶、運慶らの関係は互に同系統あるいは同派の仏師であるよりも、むしろ別の派の仏師であると考えた方が良いのではないだろうか。文治二年の前述した成朝の幕府への言上に対して、頼朝は公家側に対して推挙状を出しており、その結果成朝に対しては、東金堂の造仏の代りに金堂の弥勒浄土の諸像、すなわち、弥勒像を中心とした、五十二軀にも及ぶ菩薩、羅漢、八部衆、天人、四天王、金剛力士の群像の造立を受持させた様で、建久五年九月廿二日の興福寺の金堂の造営供養では、その造仏賞として、法橋に叙せられているが、その間、あるいはそれ以後にも慶派と関連した事蹟は知られていない。寧ろその間に於ける南円堂の造営の際には、興福寺別当の信円が当時氏長者であった兼美に「堂々仏等被_レ仰_三京都仏師_一不_レ可_レ然_三之_レ由_一」などと語っていることが、玉葉の文治五年八月廿二日の条には記されており、当時公家側で造立していた仏像は、九鉢の講堂仏、食堂十一面観音像一軀ぐらいしか、知られていないから、この「堂々仏」の中には当然南円堂の像も入っていなければならないだろう。従って当時南円堂の像の製作に当たっていた康慶も、この「京都仏師」の中に含まれるであろう。

初期の慶派について (一)

以上の様な考察の上に立って、慶派の由来を考えるならば、彼等の作品に何らかの奈良仏師の伝統と言ったものを想定して、そこから運慶様と呼ばれる新しい作風の成立を説明することは極めて危険な点を持つのではないだろうか。

三 治承以前の慶派

慶派の事蹟を治承以前に求めると、仁平二年(一一五二)九二廿日に康慶が等身の吉祥天像を造ったことが納入経巻の奥書によって知られるのが最初である。その後長寛二年(一一六四)十二年十七日に供養された蓮華王院本堂の中の一鉢の千手観音像の足柄に運慶と墨書銘を持つのが見られ、恐らく康慶もこの時の造仏に関係したものと考えられる。この作品が偽銘のものであるとの説もあるが、それについては後に述べることにする。蓮華王院と慶派との接觸はこの後治承元年十二月十七日に供養された同院内の五重塔の造仏を康慶が受持つて、その賞として法橋に叙されたことや、又その後建久四年(一一九三)三月九日、後白河法皇のために院内に一堂を建立供養し、そこに院尊作の丈六阿弥陀三尊と共に康慶の丈六不動三尊を安置しており、又その後建長の本堂再建の時にも、その孫に当る湛慶が修理大仏師として本尊を造立している。この中尊の千手観音坐像の銘文の中にある「……但康助四代御寺大仏師也……」の記述が、恐らく今日の慶派と奈良仏師とを結びつける根源となり、或は現在見られる様な大仏師系譜を生み出したのではないかと思う。この記述の意味する「四代」と言う

ことが、何を指してのことであるか、甚だ不明確で、この解釈については又、他日を期したい。

この長寛の蓮華王院造営の後に続く慶派の事蹟は安元年間には、円成寺の旧多宝塔の本尊大日如来像を運慶が康慶のもとにあって造立していることである。この円成寺は後白河院の御宇に寛遍大僧正の開基になると伝えられているが寛遍大僧正は仁和寺、東寺長者と言った経歴を持ち、かたわら東大寺別当を兼任している。この寛遍僧正の隠居寺が円成寺であると思われるが、仁安三年(一一六八)六月に寛遍が没し、その七年後の安元年十一月廿四日に本堂脇の多宝塔の本尊として運慶が造り始めたのが、この大日如来像である。この像が寛遍僧正に關係あるものかどうかは分らないが、前節で快慶の先師として考えた定遍權僧正は、この寛遍の弟子であることを考えれば、当時の康慶、運慶らはこうした系統の寺、すなわち仁和寺とか、東寺、醍醐寺などと言う、真言系の寺院のいづれかに属する仏師であったと考えられる。

四 南都復旧の経過と慶派の活動

(一) 東大寺について

治承四年(一一八〇)十二月廿八日に平重衡の率いる数百騎の官兵の手によって市中に放たれた火は折からの暴風にあおられて東大寺、興福寺を始めとして南都は悉く灰燼に帰したのであった。焼失の規模

を述べるには、寧ろ火災を免れた建物を挙げた方が良い。東大寺で残った建物は、法華堂、二月堂、食堂、僧正堂、鐘堂、唐禅院堂、上司倉、下司倉、正院、国分門、中御門、転蓋門、南院門、などであり、興福寺は更に徹底的に焼きつくされて、残るものは、小房が僅かに五字ばかりと報告されている。寺外では禅定院とその附近、新薬師寺附近が少々残る程度で、如何にこの時の火災がすぎまじかったものか、恐らく想像を絶するものであったことだろう。この火災に際して焼失した堂舎から仏像を救い出したとの報告は僅かに興福寺の西金堂十一面觀音像一軀のみに終っており、玉葉に見える春日神主泰隆の注文状にもある様に、官兵に追われたが故に、仏像を救い得なかつたとすれば、恐らくこの時興福寺にあった無数の仏像は西金堂の一軀を除いて他はすべて堂舎と運命を共にしたものと考えねばならない。勿論現在の興福寺に見られる十大弟子、天竜八部衆の像も、当初のものはこの火災を免れ得なかつたはずである。一方東大寺では金銅の大仏まで無慙にも首は焼け落ちて後にあり、手は折れて前に横たわると言った状況で、当時の人々にとっては、正に仏法王法滅亡の末法の世の実現として映じたに相違ない。

ところが、この両寺に対する再興造営の動は、こうした大焼亡の直後から始まっている。こうしたところはやはり、大仏は国家の象徴的存在、一方興福寺は摂関の藤原氏の権力のモニュメントであったからである。

養和元年(治承五年一一八一)三月十七日には、藤原行隆が勅使として鑄師十余人を引率して、東大寺へ向い、大仏の修理をはかった

が、鑄師らは「此事は人力の及ぶ所に非ず」とその工を辞退している。このころ高野山に住していたと思われる俊乗房重源上人が四月九日にはこの勅使行隆の許に、天平の行基の例にならって衆庶を勤進して大仏の再建にあたろうと申し入れており、その後六月廿六日には造寺官などの任命が行われ、八月十日より大仏殿以下の木作を始めることが定められている。八月には重源に勸進にあたる可く宣言が下され愈々大仏の再建の大事業は本格的に進められる態勢がととのえられたのである。

この時の宣言には「礎石を旧製に任じ、山木を取り、以て造営を致し、鎔範に良工を撰び、国銅を集め、以て修補せんと欲す」とあるがこの「撰鎔範於良工」の意味は鑄師を指すものではなく、鑄型の原型を作る仏師に良工を撰び、これに当らせると解するのが妥当であろう。寿永元年二月廿日の玉葉には「東大寺大仏御首事、以_レ土可_レ造_レ形云々」と云う重源聖人の言が記されており、この時には、鑄師陳和卿らは、大仏修理には未だ関係していない時期であって、陳和卿らが大仏に関係するのは、同年の七月廿三日以降のことであると考えられる。(東大寺統要録造仏篇、玉葉寿永元年七月廿四日)従って、こう言った鑄造原型製作の仕事に仏師らが当然参加しているものと考えねばならない。

一方建久六年(一一九五)三月十二日には東大寺の大仏殿が完成して、その供養が営まれているが、その勸賞(三月廿二日)に際して、康慶から賞を譲られた運慶が一躍法橋を超えて法眼に叙せられていることが、東大寺統要録や壬生文書などに記されている。この時の勸賞

は時期と、その供養の性格から見て、大仏及び大仏殿に限られるものと思われるが、慶派の他に知られている事蹟は、南中門の二天しかない。この中門の彩色多聞、持国の二天は快慶と定覚がこれに当たっているが、大仏の脇侍二菩薩像、四天王像などの造営はこの供養の後の建久七年六月十八日から始められており、それ等の諸天は南中門の二天をも含めて建仁三年(一二〇三)十一月卅日に一括して供養が行なわれている。して見ると、この建久六年の東大寺供養に於ける勸賞は一休何を意味するものであろうか。

東大寺統要録の供養篇建久記にある、この勸賞の問題となる点を抜抄して来ると次の如くである。

「法眼運慶 法眼康慶 法橋良延 經師良嚴華 院永 法印印尊
賞讃 賞讃 賞讃 賞讃 賞讃 賞讃

大和尚南無阿弥陀仏、右衛門少志紀兼康 行事 李宇 筑前国内可充
賞 賞 給備田伍町

中略

造仏次官小槻有頼陳和卿道々工以上追可申請

建久六年三月廿二日

この中で良延に賞を譲った経師良嚴はこの造寺造仏と共に行われた、金字紺紙大方広仏華嚴經一部八十巻を始めとした多くの写経の事業にあたった経師らの頭梁と思われるし、院永に賞を譲った院尊は大仏の光背の半丈六の化仏十六軀を六人の弟子と六十人の小仏師を率いて造立している。次に大和尚号を許された南無阿弥陀仏とは言う迄もなくこの東大寺復興の中心人物として活躍した大勸進俊乗房重源上人であり、行事賞を受けた紀兼康もまた復興工事か、あるいはこの供養の行

事にあつた人であろう。次に筑前国内に俵田五町を給された李守は、現在東大寺南大門に残る狛犬の作者と言われる石工宇六郎のことと思われ、恐らく大仏殿などの鋪石を作るのにあたつたものと考えられる。

さてこう言つたこの時の勸賞にあつた人々に伍して、康慶に賞を譲られた運慶が特に例の少い直叙法眼と言う二階級特進にあつたのであろうか。大仏の開眼式の際に「令_レ仏師開眼」と言うことが東大寺統要録の供養篇文治記の大仏開眼式の条に書かれているが、この時の仏師とは恐らく後白河法皇のことかとも思われる。そうすると、仏師康慶が大仏の仕事にたづさわる事は、先述した大仏の頭部などの原型製作以外には考えられない。

この大仏の修造の事業は寿永元年七月に宋人鑄師陳和卿らの参劃を得てにわかに進み、翌寿永二年二月十一日には右手を鑄造し、その後四月十九日から五月十八日にかけての三十九日間に一挙にその頭部の鑄造を完了している。この間各所に於て無事に鑄了せんことを祈願する勤行の行われたことは、東大寺統要録にも記されているが、従来問題となつている僧運慶が願主となつた八巻の法華經の書写もこの間に行われていることは、この大仏の鑄造と何等かの関連があるものと考へられる。この法華經の奥書によると、この写経はもともとは安元年中の発心によるものであるが、宿願が開発し、寿永二年四月八日から準備を始め、六月七日には八巻の書写を完了している。写経の行われた所は、京都の唐橋末の法住寺附近となつており、礼拝結縁者の中には快慶、源慶、静慶らの名が見え、又經卷の軸身には東大寺の焼け残

りの木を使用していて、従前この願主僧運慶が仏師運慶その人ではなからうかと言ふことが問題となつていたが、この写経の時期と、大仏鑄造の時期とが丁度符合すること、及び康慶、運慶らが大仏の頭部の原型あたりを製作しているらしい点などを綜合して見るならば、大願のために法華經を書写する僧運慶は、正に無事鑄造の完了せんことを祈る仏師運慶その人でなければならぬ。なおこの經の執筆僧の一人珍賀とは宿曜師として名の知られた珍賀法橋のことと思われるし、結縁者として名を連ねている中原宗成は玉葉の治承二年正月廿六日の条に見える式部承宗成がその人ではないかと思われる。(式部などの下級吏には中原朝臣の姓が多く見られる様であるし、玉葉の治承三年正月十七日の条には越後少掾正六位上、中原朝臣宗弘(文章生)の名が見えるが、これも中原宗成の何かに当るかも知れぬ)又結縁者藤井貞久は治承四年正月の除目に名を連ねる阿波大目從七位上藤井宿弥貞方の縁者かとも思われるし、更には同じ除目に名を連ねる伊象大掾草部宿弥末光が法華經の結縁者源末光であるかも知れない。そうして見ると、この運慶は寿永二年のころにはかなりの知己を院関係の下級官吏に持つていたことになり、蓮華王院の造仏にもあたると言う康慶、運慶らの治動も何かその間の事情が推察できさうである。又この様に、康慶、運慶らが大仏の修鑄に關係したと考へるならば、慶派の後の作品に見られる(写実主義)と言つた作風の問題に、更に一つの解決の材料を新たに加えることにもなるであらう。

(統)